

ややこしい  
ややこしい

～チャックと  
ファスナー～

芳田尚哉

「ちょっと聞いてくれるか」

男が唐突に言った。

「兄さん、なんですかのん？」

若い男が答える。

「この前な、ガムに行ってきたんや」

「ガム？ どこですかのん、それ」

若い男は世界地図を思い浮かべてみるものの、それがどこだかわからない。

「お前、アホちゃうか。ガムも知らんのか。ほんまアホやな」

「ほんまに、そこどこですかのん。適当な事言うてんちゃいますのん？」

「南のリゾート地やないか。南の島や南の島」

「南の島？ .....それってグアムですか」

若い男はしばらく考えて、ようやくそこに思い至った。

「そうや。ガムや。知っとるんやんけ」

男は満足そうに言う。

「兄さん、ガムやのうてグアムですって」

若い男はため息を吐いた。

「そんなん、どうでもええやろ」

「どうでもええ事ありませんって」

「ほんでな。そこで変な店員がおったんや」

男は若い男の言葉を無視して、マイペースに話し始めた。

「チャック・プリーズ」

男は手芸店にいた。手にしたハンドバッグは、ぱっくりと口が開いてしまっている。どうやら壊れてしまったらしい。

いっそハンドバッグを買い換えればいいと思うものだが、思い入れのある品なのでそういう事はできない。今までも修理を繰り返して使ってきたのだ。

「C h u c k ?」

店員はクエスチョンマークを浮かべる。

「そうや、チャックや。チャック・プリーズや」

男は日本語を交えつつ伝える。

「T h e r e i s n o c h u c k .」

「チャックあらへんのか？」

男はノーだけを聞き取った。

「G o t o t h e t o o l s h o p !」

店員はそう言って、向かいにある工具店を指す。さすがに肉屋と間違える事はないだろうと

考え、なにかしら機械の部品として必要なのだろうと案内した。

「ゴー？ なに言うてんねや。つうか、チャックあらへんのか？ ここは手芸の店ちゃうんか」

男は観光パンフレットを確認する。確かにここは、可愛い雑貨もある手芸店として紹介されている。

「ほんまにあらへんのか？ これやで、これ」

男はハンドバッグの該当部分を指しながら言った。

「Oh! Fastener.」

店員はすぐに、そのハンドバッグに合いそうなファスナーを持ってきた。

「なんや、あるんやないかい。焦らさんと、さっさと出しいな」

なんとか目的のものを手に入れる事に成功した。

「—つうわけや」

説明を聞いた若い男は、大きなため息を吐いた。

「兄さん、日本語じゃ通じひんですわ」

「なに言うてんねん。ちゃんとチャック・プリーズ言うとったわ」

それを聞いて、若い男はまたため息を吐く。

「兄さん、チャックは日本語です」

「はあ？ お前、頭大丈夫か？ チャックってカタカナやんけ。漢字ちゃうんやし、日本語なわけあるかい」

「カタカナでも日本語ですって。チャックはファスナーの商標ですねん」

「なにわけわからん事言うてんねん。日本語で話せや」

「せやから日本語ですやん」

「わけわからんぞ」

「兄さんにもわかるように言いましょか。チャックいうんは、日本でのファスナーの愛称ですねん。せやから、外国やったら通じひんのですわ」

「カタカナの分際に通じひんとか、わけわからんぞ」

「とにかく、カタカナですけど通じひんです」

「カタカナのくせになんやねん。日本語やったら、ひらがなで書けや、ボケ」

「なんで怒られなあかんですか。カタカナも日本語ですし」

「わけわからんは、アホ」

「さっきから、なんで自分がそんな事言われなあきませんの」

「ほんだら、誰に言うたらええねん」

「そんなん知りませんやん」

「ほんだらお前でええやんけ」

「なんですか、それ」

若い男は諦めるしかなかった。

F i n o .

ややこしいややこしい～チャックとファスナー～

<http://p.booklog.jp/book/110253>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110253>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト